様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　６月　１２日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７～２００８
課題番号：１９５３０６８０
研究課題名（和文）　教育の臨床的研究と教員養成・教師教育の連関に関する研究

研究課題名（英文）　Study on relation between clinical study of education and teacher training, teacher education

研究代表者
宇佐見　香代（USAMI　KAYO）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０２９４２７５

研究成果の概要：

教師は、それぞれの教室で生起する特定的・一回性的な状況と絶えず相互作用しながら、日々授業の創造や学級づくりの問題に取り組んでおり、具体的文脈の中での臨床的実践的な知覚や熟考、判断を基盤にした臨機の活動をその専門性の主軸としている。様々な問題状況のなかで、教師たちがその見識を拡げ葛藤を乗り越えて生き生きとした実践を生み出すためには、この具体的文脈へ教育研究者や将来教師になる学生が共同参加して臨床的研究を進めることが必要とし、その研究成果をまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育方法学　教員養成・教師教育

１．研究開始当初の背景

教員養成・教師教育は、従来以下の三つの要因によってその発展を疎外されてきたと言える。ひとつは、（１）<u>教育研究における臨床的アプローチ</u>の未発達である。教師と研究者が役割を異にしながらも同じ文脈を共有する中で授業創造や学級づくりの問題を深め合う関係性が希薄なために、教育研究そのものが具体的な教室の文脈における教師の仕事の実相に充分に迫りえていなかった。

第二は、（２）<u>教育の臨床的研究と教員養成の連関</u>の未発達である。臨床的研究の未発達な大学の教員養成では、いかにその教育内容や教育方法を精緻に講義しても、具体的な子どもの姿を欠いた脱文脈的な知識や技能の伝達に終始せざるをえない状況にあった。

第三は、（３）<u>教師教育における臨床的スタンス</u>の未発達である。教師の専門性が具体的文脈のなかで形成され再形成されるものだとすれば、同じ子どもや教室の事実を共有

しながら、そこでの問題の理解の仕方や解決の道筋をめぐる多様な実践的見識を交錯させる学校の同僚性を基盤とした授業研究の場こそが、教師としての成長の中心的拠点とみなされる。しかし、既成の研修の多くはむしろ教師を具体的な文脈から切り離す傾向にあり、教師にとっての生きた学びの場となりえていなかった。

２．研究の目的

「１．研究開始当初の背景」で述べたような問題状況を打開するために、本研究では教師・学生・研究者が、共同して教育現場の具体的文脈に参加する中で臨床的研究を行った。その際、授業づくり論、学習指導論、生活指導論、カリキュラム論、メディア教育論、表現教育論といった異なる分野の研究者が、それぞれのアプローチを生かした多角的な教員養成・教師教育実践と教育実践研究の連関の可能性を追求することを目的とした。

本研究の第一の目的は、（１）<u>教育の臨床的研究を軸とした教師・学生・研究者の関係の再編</u>を試みるところにある。教室や学校の具体的文脈に、教師・学生・研究者がそれぞれの仕方で参加し、問題の共有と見識の交流を重ねる共同研究の場をとおして、これまでの「大学の研究」と「教員養成」と「教師教育」の三者を一貫して捉え直すことを課題としている。教育の臨床的研究や学生のボランティア参加はそれぞれに試みられているが、それらの全体構造を編み直す試みはいまだ提起されていない。

第二の目的は、授業づくり論、学習指導論、生活指導論、カリキュラム論、メディア教育論、表現教育論といった（２）<u>多様なアプローチの具体的文脈における研究の総合の模索</u>にある。研究者はそれぞれの専門分野の枠内で評価されるシステムのなかにあるため、比較的近い研究領域にありながらも、互いの研究を交える機会は少ない。その結果、教員養成学部の学生はそれぞれの研究成果をバラバラに習得することになる。それに対して、本研究の臨床的共同研究においては、研究者が教育の臨床的研究の立場を共有し確認しつつ、具体的現実のなかで各研究領域がどのように連関するかをお互い学びあうことが可能になる。こうした試みは、大学における各学問領域が断絶した座学と体験主義的な教育実習の二極分化による弊害を打開する目的をもっている。

第三の目的は、（３）<u>教師の力量形成の新たなモデルづくりの模索</u>にある。教師の実践的力量形成の必要性は多方面から指摘されているが、それに対する対策は、もっぱら脱文脈的な知識やスキルの伝達講習や形式的な評価システムの整備でしかないことが、教師や行政官や研究者の時間とエネルギーの浪費を招いている。それに対して、具体的な教室の文脈において教師が抱える複雑な葛藤に焦点を当て、そこに学校の同僚教師・学生・院生・専門分野の異なる研究者が参加する臨床的共同研究は、教師のエンパワーメントを関係の再編成のなかに位置づける新たなモデルとしての意味をもっている。

３．研究の方法

すでに述べてきたように、教育の臨床的研究、すなわち、教師・学生・研究者が、共同して教育現場の具体的文脈に参加する中で、その実践のなかで生起した具体的な出来事、教師が抱える葛藤、子どもの変容の事実等とその意味を語り合うことを通じて、参加者それぞれの多様なアプローチを試みる。以上のような研究方法を採った研究成果のまとめの特徴としては、研究者がそれぞれに関わる教育実践（ここには自らの教員養成・教師教育の実践も含む）や教育研究の現実と、そこで知覚された教育的意味、想起された思考を、その実践の具体的状況の描出とその経験を共有した教師や学生・院生の語りを踏まえて綴る方法をとる。

４．研究成果

<u>（１）教育における臨床的研究の意義とその立場の確認</u>

本研究は埼玉大学教育学部学校教育臨床講座のスタッフによって行われた。わが国の教育研究組織のなかで「臨床」を冠するところはいくつもあるが、それぞれが独自の方向性や専門性をもって存在しており、そのすべてに共通する立場を的確に指摘することは困難である。しかし、少なくとも、既存の教育研究の在り様を批判し乗り越えようとするところから出発していることに疑いの余地はないと思われる。現代の教育や子どもを巡る状況は深刻度を増し、様々な問題が山積していることは、教育関係者だけでなく広く国民全体の共通の認識になっている。にもかかわらず、これまでの教育研究では、そのような教育の現実や現場の問題そのものに十分切り込むことができていなかったのではないかという反省がこの領域の存在を支えている。私たちの講座で教員や院生・学生が共有している「現場の事実との対話」を中心に据える態度は、いわば教育研究に携わる私たちの反省的実践の一環として創出されているものであると確認できた。

教育における理論と実践の問題は、教育研究においては避けて通れない永遠の課題である。これまでも、例えば思弁的教育学を脱却し、「実際的教育学」や「教育実践学」などのように実践を教育研究の中心に据える提言は繰り返し行われている一方で、複雑な

教育実践の現実を扱う研究は、社会科学における教育学の「学」の存立の志向によって常に問い直されている。さらに、教育学領域だけでなく、今や大学及び社会全体を覆う競争的環境が教育研究（さらに研究は何のために行われるのか？と言った素朴なところでも）、本来の意味や目的を見失わせるような深刻な事態も生じている。本研究では、理論的体系性や研究方法の一環性、さらに科学性普遍性を追求する「学」への志向性は十分とは言えないという自覚はあった。しかし、この志向性を一旦中断して、各研究者が真摯に、自ら向き合った教育実践（ここには自らの教員養成・教師教育の実践も含む）や教育研究の現実と、そこで知覚された教育的意味、想起された思考を、その実践の具体的状況の経験を共有した教師や学生・院生の語りを踏まえて、ありのまま綴る形でまとめることを心がけた。先に批判した「これまでの教育研究」のあり方そのものから十分脱却し、その課題を克服したとは言えない所も勿論あるが、「ためにする」研究から自由でありたい、そして、子どもの豊かな成長発達のために、その仕事を担う教師を支えるための教育研究という本来の目的に立ち戻る、現場の声に誠実な研究であることは自負できると考えている。

（２）教育実践の実相を読み解き、その本質に迫るための研究方策の有効性とそのプロセスを学生と共有することの意義

教育実践は一人ひとりの子どもの生活する具体的な教室の文脈で行われている。教師の仕事は予め決められた教育内容や教育方法の技術的適用以上の要素を常にもつものであり、教師はそれぞれの教室に織りなされる特定的・一回性的な状況と絶えず相互作用しながら、授業の創造や学級づくりの問題に取り組んでいる。それゆえ、教師にとっての生きた学びは、脱文脈的な教科内容や授業技術に関する一般的な知識やスキルの習得にとどまるものではなく、むしろ具体的文脈の中での実践的な知覚や熟考や判断を基盤にした学びの場づくりをその専門性の主軸としている。様々な問題状況のなかで、教師たちがその見識を拡げ葛藤を乗り越えて生き生きとした実践を生み出すためには、この具体的文脈へ教育研究者や将来教師になる学生が共同参加し、臨床的研究の体制づくりをすることで活路を見出すことができるのではないか、このことを抜きにして問題状況の本質的な問題解決の道はみいだせないのではないかと考えた。

本研究では、このような教育実践の実相に迫りうる臨床的研究のアプローチを、教師と教職を目指す複数の学生と共有し多様にすることの有効性を確かめることができた。

（３）各研究分担者の研究成果とその総合の課題

以上に述べたような、①教育研究が具体的で複雑な教育実践の実相に迫る形で展開されているのか、②このような教育実践を担う教師の実相にふさわしい教員養成・教師教育はどうあるべきか、③教育研究の成果が、日々深刻度を増す教育現実の本質的な問題解決に資する形で生かされるためにはどうあるべきか、など、教育臨床的研究の研究課題を共有したそれぞれの研究者の探究と実践の一端と今後の課題を、以下簡単に展開することにする。

①庄司は、教師教育・表現教育研究の立場から、実践を開き合う場への協働参加によるアクションリサーチの手法を採った研究の過程で気付かれた教育的な知見をふまえ、そのような研究手法を取ることの意義を、教職専門性高度化、教員養成及び学校改革への可能性を含めて論じた。

②八木は、授業構成論研究の立場から、従来の教育内容概念を整理してその「実体的教育内容」の性質を指摘し、一方、教育内容の意味が一回的個性的に生成される音楽授業の事例を分析を通して、「関係的教育内容」の性質を提起し、その臨床的研究の必要性と新しい授業構成の可能性を指摘した。

③宇佐見は、幼小連携の課題を担う生活科のあり方を研究する立場から、教員養成学部における生活科関連科目における学生の遊びについての意識を検討し、小学校教員における遊び指導のあり方を幼稚園教員免許を取得した小学校教員志望学生と共に探究した。

④舩橋は、生活指導論研究の立場から、特に新任教員２名に焦点化してその実践の展開と変容を追跡し、それぞれの教育方法の変革と省察の枠組みが実践の具体的文脈の中でどう転換されていったのかを検討した。

⑤岩川は、教育における臨床の知を研究する立場から、学級崩壊を起こした新任教師の語りに学生とともに耳を傾け、子どもと実践の「状況」の見え方を多様にする活動を通して、教師の子どもへの関わりの試行錯誤とその中で教師の実践観が変容していく過程を描出した。

⑥野村は、メディア教育・教育工学的研究の立場から、ICT 活用指導力の本質を分析し、その成果を日々の教育実践に資する形で提供するための教師教育のあり方を、教師の情報活用能力の向上に焦点化して研究した。

以上のような各研究分担者の研究成果を、本研究の目的に照らし合わせて自己評価するならば、以下のようになる。

（１）教育の臨床的研究を軸とした教師・学生・研究者の関係の再編

それぞれの研究成果から明らかなように、教師・学生・研究者が、対話的・共働的スタンスを軸とした臨床的研究をとおして具体的文脈に参与することによって、①学生は目先のスキルを越えた教師としてのヴィジョンを形成することができること、②教師は具体的な実践の文脈に参加する他者との対話の中から、自らの実践を省察しつつ力量を高めていくことができること、③研究者自身がこのような研究の過程の中で従来の教育研究や教員養成・教師教育の枠組みを超える教育学的な知見を得ることができることが確認できた。

（２）多様なアプローチの具体的文脈における研究の総合の模索

教育実践の実相に迫る上で、教育臨床的研究の意義と有効性は共有できたことに加え、各研究者の多様なアプローチによる研究成果から学び合う意義は確認できたが、それらを総合して本研究の意義をさらに深める検討は不十分であった。今後はそれぞれの研究者がそれぞれの研究領域で研究を進めるのと同時に、それらの総合化を進めることが課題として残った。

（３）教師の力量形成の新たなモデルづくりの模索

従来の教員養成・教師教育の座学や伝達講習的なあり方を打破する教師の力量形成の方向性は明らかになりつつあるが、本研究では明確なモデル化には至らなかったことが大きな課題として残った。今後は、本研究成果と学校教育臨床講座の教員養成カリキュラムとを連動させて、その可視化・モデル化をさらに進める必要があると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

①庄司康生、教育の臨床的研究と教員養成・教師教育の連関に関する研究－実践を開き合う場への協働参加によるアクションリサーチの教職専門性高度化と教員養成さらに学校改革への可能性－、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.1-7、２００９、査読無

②八木正一、授業の臨床的構成と教育内容のとらえ方　－音楽科の場合を中心にしてー、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.8-15、２００９、査読無

③宇佐見香代、生活科における遊び活動の意義とその指導について、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.16-24、２００９、査読無

④船橋一男、教育方法の変革と省察の枠組みの転換－２人の初任教師の教育実践から－、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.25-38、２００９、査読無

⑤岩川直樹、教育実践の原形質、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.39-42、２００９、査読無

⑥野村泰朗、ICT 活用指導力の本質と日々の教育実践に資する教員の情報活用能力の必要性、教育臨床研究（科研費報告書）、３巻、pp.43-50、２００９、査読無

６．研究組織

(1)研究代表者

宇佐見　香代（USAMI　KAYO）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０２９４２７５

(2)研究分担者

八木　正一（YAGI SYOICHI）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：７０１１７０２６

岩川　直樹（IWAKAWA NAOKI）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：７０２５１１３９

庄司　康生（SYOJI YASUO）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：２０２１６１６２

船橋　一男　（FUNABASHI KAZUO）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：８０２８２４１６

野村　泰朗（NOMURA TAIRO）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：３０３１２９１１